



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	星川啓慈・石川明人『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？ 一私たちの戦争と宗教一』（並木書房、二〇一四年）
Author(s)	小林, 敬
Citation	基督教學, 50, 69-72
Issue Date	2015-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62365
Type	other
File Information	07 kobayashi.pdf



星川啓慈・石川明人

『人はなぜ平和を』

祈りながら戦うのか？

―私たちの戦争と宗教―

(並木書房、二〇一四年)

小林 敬

本書二共著者のうち、本会会員たる桃山学院大学の石川明人氏は、近年『戦争は人間的な営みである―戦争文化試論』(並木書房、二〇一二年、以下「前々著」と略す)及び『戦場の宗教、軍人の信仰』(八千代出版、二〇一三年、以下「前著」と略す)の二著作を刊行し、従来「反戦平和の主張を叫ぶ」色彩が強かった戦争と宗教(特にキリスト教)の関わりについての多くの議論とは、また一味も二味も意趣を異にして、ことに戦いの状況のただ中に

生きることを余儀なくされた一人一人の人間たちの生を深く掘り下げた、極めて緻密な研究を世に問うて来られた。このうち前著については、本誌前号で堀雅彦氏による書評が掲載されているところでもある。

これらに続いて石川氏が、大正大学の星川啓慈氏との共著の形で刊行した本書(「大学生」学部生の意だろうが)等の一般読者が主な対象」との断り書きもあったが、評者は特にこれを意識せずに読んだ)を、本誌今号において評するに当たり、評者小林は当初、やはり本誌が北海道基督教学会の会誌であり、本誌での書評掲載の基準が「会員の著書」を前提としている以上、当然ながら星川氏よりも石川氏に焦点を当てるつもりであった。

しかし評者は結論的に、むしろ他方の共著者たる星川氏への評に比重を傾けている。それは決して、評者が石川氏の論述を低く評価するからではない。むしろ逆に、前二著における「石川氏ならではの持ち味」(前著評者堀氏はこの点を若干批判的に取り上げていたのに対し、本書評者小林は堀氏と違ってむしろその点をこそ積極的

に評価している)が、以下に記す本書の構造により、抑

えられざるを得なかったように感じられたからである。

本共著書では（まえがきは石川氏、あとがきは星川氏
の分担であつて）本文の執筆分担の分量が、ほぼ両共著
者同量ずつとなつてはいるが、全体の流れとして、星川
氏が全巻の基調を概ね主導し、その中に石川氏の論述
を織り込む傾向が現れている。全巻は三部構成、即ち、
「戦争の現実」と題する第一部、「戦いの中の矛盾」を号
する第二部、そして「平和への葛藤」を掲げる第三部か
ら成り立っている。うち第一部に先立つ序章以下、第一
部の全四章と、第二部冒頭の第五章までは、連続して星
川氏が執筆し、最初に全巻の基調を固めている。星川氏
からバトンタッチされた石川氏は、第二部の残る第六〜
一〇章で、主に「キリスト教と戦争」についての、前二
著からつながる、内在的な詳しい現象分析を展開してい
る。しかし、こういう位置取りで巻内に取り込まれた石
川氏の論述は、まるで「星川氏が述べた総論に対する各
論の提示」のように見えてしまう。さらに最後の第三部
では、まず第十一章で、これまでの正規軍戦争に対して
近年極めて増大してきたテロリズムについての問題を星

川氏が扱い、第十二及び十三章で石川氏による「正戦」
の当否の問題及び「良心的兵役拒否」の問題についての
論考を挟んだ後、最後の第十四章は「諸宗教による平和
運動」に関する星川氏の論述で結ばれている。全巻での
両者の論考のこの組み合わせ方は、どう見ても、「星川
氏を主、石川氏を従」とするような印象を読者に与えざ
るをえない。

もし両共著者の論調が共通するか、又は違いがハーモ
ナイズされていれば、この構成でも特に評者は読みにく
さを感じなかったかもしれない。だが、石川氏分担部分
が概ね前二著の流れを継承した論調を呈している（それ
でも前述の如く評者の「鼻」には石川氏のかんりの「遠
慮」が匂っているが）のに対し、全巻を主導する星川氏
執筆部分の論調には、石川氏とのかんりのギャップが感
じられる。

何よりも評者が挙げたいのは、『人はなぜ平和を祈り
ながら戦うのか？』という本書標題の主語である「人」
の中に、「論者自身は含まれるのか？」という点である。
石川氏は「祈りつつ戦う」ところの「人」を明らかに「わ

がこと」として捉える点で一貫している。例えば第二部第九章中の一五八―一六〇頁の「人間の誰しもに共通する負の可能性」と題する節には、この姿勢は特に明白である。しかし星川氏の場合、この「祈りながらも戦う」ところの「人」の中に、他ならぬ星川啓慈氏ご本人は、含まれていないように感じられて仕方がない。例えば、全巻の基調を決定づけている第一部における、「人は人を殺したがる」（第一章標題）にも関わらず「それでも戦争はなくなる」（第二章標題）ことを取り上げる記述は、脳科学者の議論の援用からカントの永遠平和論への援用に移ってそれを批判する心理学者の研究の紹介に続いた後、心理学者の諸説を引いた第三章「戦闘における生理と心理」及びハンチントンらの文明論を引いた第四章「宗教と戦争の関係」に到っているのだが、このすべてにわたり、「祈れども戦う」主体たる「人」は、あくまで観察の「対象」であって、そこに自分自身をも含める「当事者意識」は、少なくとも評者には読み出せなかった。（或いは星川氏は「学として戦争を考察する以上、それはあくまで客観的に叙述されねばならない」

という信念をお持ちなのかもしれないが、それならそれで、「人はなぜ……？」という「読者に客観科学のスタンスを想起させない」題名を付けるべきではなかったらう。もし本当にそうだったら、価値判断と不可分な疑問詞「なぜ(why)」ではなく、価値中立的な「いかに(how)」こそが選ばれるべきであつたらう。）

以上についての具体例を網羅できる紙数はないが、二点だけは触れておきたい。第一に、石川氏が「我々自身が必要悪としての暴力を求める事例」の中に、狭義の軍勢力のみならず広義の武力として、警察力ないし治安維持活動にまで視野を広げた考察を展開している（例、本書一〇七―一一七頁）のに対し、星川氏がそれに言及するのはわずかに一箇所（九九頁での文献引証に際する、そこに「軍人のみならず警察官や消防士も含まれること」への補足的な註釈）のみに留まっている。それによって評者は、我々自身が「当事者」として「暴力、武力を求めずにおれぬ」リアリティーにつき、両共著者間のかんり温度差を覚えさせられた。第二に、星川氏による最終第三部の冒頭章の、現代世界がかつての正規軍戦争に

加えて大きく苦しめられているテロリズムの問題について

の論述（ここで同氏は石川氏の前々著をも引用している（一一七～一一八頁））の中で、テロと言われているものを「よく見極めることが重要だ（一二五七頁）」と説くべく、一般読者も含めてテロリストになり得る可能性を指摘しているが、或いは星川氏本人はここに「当事者意識」を自認しておられるのかもしれないが、「誰でもテロの被害に遭遇しうる可能性」は完全に視野の外に抜け落ちてゐる。現実には我々自身を憎悪に導きかねぬ深刻な事例なのに……これこそ、上記第一点とも相まって「なぜ『私たちは』戦つてしまふのか」という根源的な当事者意識から遠ざかった、客観的、いや、傍観者的な視線を感じさせてしまふ所以である。

前著及び前々著で石川氏は、自分たち自身が戦いを欲してしまふという現実（評者の本音はこれを「原罪」と呼びたいのだが、あえてここでは自制する）を度外視した観念的な平和論への戒めを説いていたのだが、今回の「相方（家主?）」たる星川氏の論調にかかる「傍観者の眼」を感じる評者は、本書を読むに於いてかなりの努力

を要したものである。

もし今後このような共著が企画されるならば、ぜひ提言したいことがある。どうか、視点を異にする共著者各自の独自性を対等に維持した上で、両者の「討論記録、座談会」なども巻末に収録してほしい。このような「意見の相違を互いに保ちつつ対等に共存しあう」姿も又、究極的には「地球規模での平和への希求」を構成する小さな組石ともなるまいか。